

中日双语图文读本

につぼん虫の眼紀行

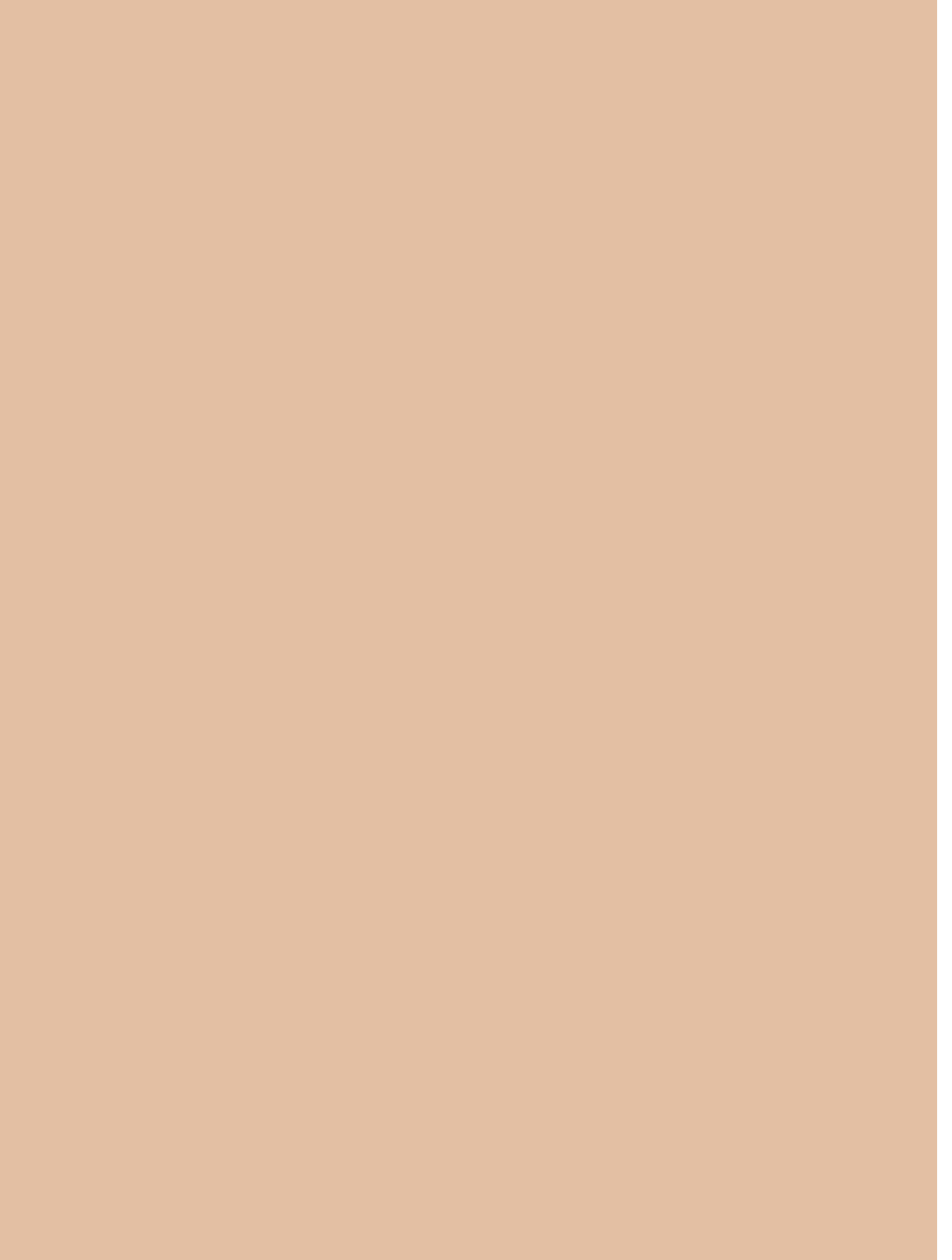
# 感悟日本

毛丹青〇著



華東理工大學出版社







# 日本語をみつめた その瞬間

ひとの記憶装置は一人一人違うのではないか、そんな気がする。一つの言語だけでもものを書いていた時には、さほどそのことを強烈に感じることもなく、無感覚でさえあった。ひとが全く聞き取ることのできない言語に触れるとき、それは言葉ではなく雑音であり、嬰兒が他の人間を見るのに似ている。人とそうでないものの区別さえつかない。しかし、絶えまない重複、倦まぬ反復によって、いつしか音声と情景が心の奥底に刻み込まれ、反射機能が形作られる。そうなるのはじめて人は外界の事物に多重的な意味を持たせることができるのだ。

二つの言語を用いての執筆が私の一つの重要な仕事となってきた。幸運にも、私が使っている中日二種類の文字は、形の上でどちらも突出した

視覚的効果をもつ。とりわけ漢字の融和の中に、ある時は重なり合い、ある時は通りすぎた見知らぬ人のように、同じ形状が全く異なる内容を含んでいる。ある学者は、一つの言語を掌握する過程は順を追って漸進する道のりだというのが、私の考えは少し違う。少なくとも外国語で執筆することにおいては、私自身よくわからない。ある日突然二つの言語が混ざってしまったからだ。それもまた深夜、夢の中の出来事だ。

その日の昼間、私には表現したい強烈な欲求が起った。口は休むことなく日本語を喋り続け、それまで試したことのない書き言葉を操った。その時の私にしてみれば、いわゆる表現欲とは何かを表現するためではなく、一つの斬新な表現を生み出したいという衝動に近かった。話すことは一種の瞬間的な行為であり、唇の運動であって、発声された言葉の意味は具体的な環境のもとにあってはじめて成立する。これと反対に、書くことは思慮の過程であり、生動的な文字は思考の吐露である。まるで万馬奔騰のごとくやってきた考えを、内心の苦痛を経て一滴一滴射出する言語による印象である。

その日の夢はだいたいこんな夢だった……巨大な天幕の上で二枚の透明な原稿用紙が翻っていた。天幕は端が見えないガラスのようであり、紙は刺繍細工のように繊細だった。顔を遮ったとしても分からないほどだろう。そのうち一枚の原稿用紙に書かれた文字は私の書いた日本語だ。もう一枚は私の中国語。二枚はまわりついて離れず、しかし重なり合わない。近寄ったかと思うと、翼を翻すように舞う。心を落ち着けてよく見ると、二枚の原稿用紙は異なる色調、異なる模様を見せているようだった。日本語は流れる清らかな泉水、中国語は群山雲海のようだ。一つは細やかで柔らかく、一つは粗放で果敢である。私は落ち着いて観察し続けた。日本語のほうは文字の運びに緩急がある。漢字は仮名の海に浮かぶ小さな島のように、もともとは漢字の部首だった仮名文字は、舞妓が飛び石を歩むようにして連なる。中国語のほうの紙は筆跡も濃く重々しい光彩を放っている。二枚の原稿用紙は、次第に近寄り、私の眼前で交差し始めて、目くるめく動きを示した。私はこのときはじめて二枚の原稿用紙の中に重複する漢字がいくつもあることを発見し

た。ひょっとするとこの重複した文字が、二枚の原稿用紙の距離を近づけている最終的な動力なのではないか？しばらくすると、これらの文字は突然跳ね上がった。そして、それらはそれぞれの原稿用紙からゆっくりと浮き上がり、空中でぶつかって、黒い固まりとなった……日常、印象、微笑、体験……同じ相貌の漢字が空気中で沸騰したようになった。このとき、どこからか現れた魔力によって私の体は震えが止まらなくなった。私は必死になって口を開け、空気中の沸き出した漢字を一つも漏らさずに啜えようとした。そして、温度はどんどん上がり、私の身体は熱くなり、涙が湧き出て、発狂した。

この夢の最後の場面で、烈火のなかから必死でもがきはい出したことを今でも鮮明に覚えている。そして、それ以来、日本語は私にとって確実に神奇なものに変わった。慣れ親しんだ漢字が機械の上の鋳物のようで、ある時は私はそれらを溶かして仮名の中に注ぎ込む。反対に仮名を多用して薄くなりすぎた文章には、漢字を運んでくる。そうすると、自分が燕のごとく身軽になった。

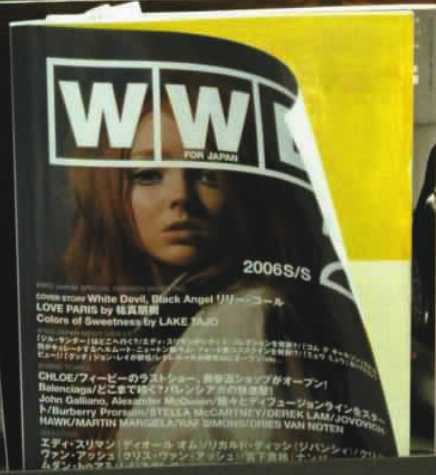
言語は檻であり籠である。しかし、同時に言語は、開放された広場でもある。特に新しい言語がある人の母国語に向かって挑戦を始め、その人の母国語と格闘しているとき、それはまさに新しい表現の契機が始まったことを意味する。もし、人の記憶装置がそれぞれ異なり、装置の定型が必ず言語に依存するのであれば、こんな推量も成立するかもしれない。少なくとも私においては、母国語の記憶装置は丸い。そして日本語のそれは四角い。四角いものには角がある。角があるならば磨き続けたい。

毛丹青

2008年1月



# BOOK & CAFE



# 凝视日语的那个瞬间

凭某些感觉,我发现每一个人的记忆装置是不同的。原来只能用单语写作的时候,我的感受并不强烈,甚至有些麻木。人一开始接触完全听不懂的语言时都觉得它是杂音,就像婴儿看见别人一样,他们分不清人与非人的区别。但是,不断的重复,不厌其烦的再来一遍,却把声音与景象刻入了人的心灵,变为了心灵上的反射机能,于是人才会对外界的事物赋与多重意义。

用两种语言写作是我的一项重要工作。值得庆幸的是,我使用的双语是中日两种文字。从表形上看,两者都具有突出的视觉效应,尤其在汉字的融合中,有时如出一辙,有时竟然像过路的陌生人一样,同样的形状却包含了完全不同的内容。有的学者说,掌握一种语言是循序渐进的过程,可我的感受有所不同,至少在外语写作这件事上,我自己都弄不明白。因为曾经有那么一天,我居然把两种语言混淆了,而且是在一个深夜,在一次梦境中。

白天,我有一股强烈的表达欲望,为了用挂在嘴皮上的喋喋不休的日语,为了用一种从来没有尝试过的书写语。这对当时的我来说,所谓的表达欲望几乎不是为了表达什么,而是为了一个崭新的表达而产生的冲动。说话等于一次瞬间的行为,或者是一次嘴巴的运动,至于发声中那些约定俗成的意义只有在具体的语境下才能成立。与此相反,书写则是一次思虑的过程,生动的文字可能是文思喷涌时的流露,犹如万马奔腾而来,但也有可能是经历了内心的煎熬以后一点一滴投射出来的话语印象。

那天的梦境大致是这样的:在巨大的天幕上,有两张透明的稿纸翩翩起舞。天幕像一块不见边际的玻璃,稿纸细如抽纱,迎面遮住你的脸也不会让你发觉。其中一张稿纸的文字是我的日语,另一张则是我的中文,它们缠绵不绝,但谁也不跟谁重叠。有时似近似远,有时双翼飞扬。我定神望去,两张稿纸似乎展示着不同的色调与纹路。日语像流水清泉,中文如群山云海,一个是细腻而优柔,一个是粗放而果断。我继续定神望去,日语稿纸上的文字时缓时急,汉字恰似一座座的岛屿,浮现于假名的海洋之中,那些原本是汉

字的偏旁部首的假名近乎于京都艺伎的碎步，间隔窄，但步步紧随。中文稿纸上的文字依然浓装艳饰，给人一种沉重而光彩的感觉。两张稿纸越飞越近，它们甚至在我的眼前开始了交叉往返，一直到我觉得晃眼的时候，才发现两张稿纸上有许多汉字是重复的。难道这些重复的汉字是拉近两者距离的最终动力吗？稍候，这些字符居然跳跃起来，然后，它们从不同的纸面上冉冉升起，在空中碰撞，化作一对对的黑色方块……日常，印象，微笑，体验……所有这些貌相如一的汉字在空气中蒸腾。这时，也不知从哪里出现的魔力，突然震撼了我的全身，于是，我拼命地张开嘴巴，在空气中咬住那些蒸腾的汉字，一个也不放过。后来，温度居高不下，我热了，流泪了，疯狂了。

那场梦的最后一个场面是我从一片烈火中挣扎地爬了起来。而且从那以后，日语确实变得神奇了。那些熟悉的汉字就像一台机器上的铸件一样，有时我想融化它们，就往里面硬灌假名。反过来，假名用得过多而使文章太稀的时候，我干脆就把中文的汉字生搬进来。如此一来，我发现自己居然身轻如燕。

语言是一座牢笼，但同时，语言也是一个开放的广场。尤其当新的语言开始向你的母语挑战，开始跟你的母语叫劲的时候，这正是为你开辟一个新的表达的契机。如果人的记忆装置不同，而装置的定型又必须依靠语言的话，以下的猜想或许也能成立。至少在我身上，母语的记忆装置是圆的，而我的日语则是方的。是方的，就会有棱角。有棱角，就要坚持打磨。

毛丹青

2008年1月



# 目 录

防府駅の落葉	2	102	防府站的落叶
専修寺の朝	9	105	专修寺的清晨
雀蜂の巣	14	107	蜂巢
吐く猫	23	112	呕吐的猫
開花予報	40	121	花讯
坐禪と風鈴	44	123	坐禅与风铃
盲女と犬	54	128	盲女和狗
イワナ	58	130	红点鲑
最終電車	70	137	末班车
夜山桜	80	141	夜山樱
東京帰途	88	146	东京归途



秋日至美的景象尽收眼底。



# 防府駅の落葉

ひと いきょう  
ひとり異郷の客となると、時には遠出をし、親しい友人を訪ねてみたくなる。

こんな思いになるたび、私は秋を選んできた。日本は山が多いため、秋  
かぜ  
風が葉をかすめ、金色の光が澄み輝き、爽快な気分させてくれる。

神戸から車を走らせ、フェリーで博多<sup>1</sup>港へ渡り、さらに車で山口県へ  
向かう。友人の家は山里にあるため道路は陰しく、ほとんどがいわゆる  
峠道で、急カーブが続き、運転するには危ないので、電車に乗り換えて  
くるようにと勧められた。そこで、彼の勧めに従って防府<sup>2</sup>市外の小さな  
駅から列車に乗ることにした。

それは小さな駅で、田舎らしく単線になっており、対向列車が来ると  
行き違うまで待たなければならない。それに、村へ向かう列車は本数も  
少なく、「智取威虎山」の小さな汽車と大差ない。防府は七世紀には早く  
も要塞があり、瀬戸内海<sup>3</sup>に面した当時の小国の国府だったそうだ。九州  
へ派遣される兵士の任期は一応三年とはいうものの、しばしば延長され、  
中には親や妻子に二度と会えない者もあった。歴史上これらの兵士を  
「防人」と呼ぶが、さぞや悲壮であったことだろう。しかし、当時の飛鳥時  
代には、これら地方諸国の軍隊の兵力はわずか五百人余りだったという  
から、戦争と言ってもさしたる規模ではなかったに違いない。

日本は他国に比べ内戦の少ない国なのだ。

防府駅の周囲は何もなく、大きな建物もない。駅からそう遠くないと

1 福岡市東半部の地名。

2 山口県南部の瀬戸内海に面した市。

3 本州と四国九州とに囲まれた内海。

ころに <sup>じゅうじろ</sup> 十字路があるが、<sup>しんごうき</sup> 信号機さえなかった。通行する車両も少なく人通りもまれなので、信号があろうがなかろうが東京や大阪のようにさして重要なこともないのだろう。私は駅前の<sup>じどうけんばいき</sup>自動券売機の前に行き、目的地までの料金を顔を上げて探した。四百七十円だ。ポケットからお金を取り出そうとした。その結果、私は自分の<sup>さいふ</sup>財布の中に一万円札しかないのに気付いた。この券売機は千円札までしか使えない。<sup>いた</sup>致し方ない。どこか<sup>こぜに</sup>で小銭にくずしてもらおうとしよう。

駅の入り口には<sup>まどぐち</sup>窓口があり、<sup>ま</sup>真<sup>びるま</sup>っ昼間というのに電気がつけっぱなしで、誰もいなかった。周りには私以外の乗客も見あたらず、駅員の影もない。ホームの列車は都合のよいことにまだ発車しそうもない。車両は黙って整列し、静けさをかもし出していた。

「すいませーん。<sup>りょうがえ</sup>両替してください」  
<sup>おおこえ</sup>大声で叫んだ。

神采飞扬的列车员迎着晨光踏上旅途。



誰も答えない。ただ風の音が耳もとをすぎ、屋根の上から木の葉がひらひらと地面に舞い落ちて、軽い土埃つちぼこりをたてる。秋風が防府駅で一番忙しい乗客なのだろうか？ひとしきりたって、慌あわただしい声が近づいてきた。

「お待たせしました。どうもお待たせしました」

中年の駅員えきしやが駅舎えきしやの中から走り出てきた。右手にはほうきを持ち、ほうきの先を地面から半尺はんしゃくほどもちあげ、額には汗がにじんでいた。私はこれを見て、もう大声を出さなかった。お金を渡ししながら、「小銭にくずしてください、切符を買うんです」と言った。

彼はお金を受け取ると、仕事机の上の金庫きんこを開けた。中身なかみをひっくり返した。その顔には困惑こんわくの色が浮かんでいた。

「ああ、ここも小銭がないですね」

彼は頭を上げて慌てて言った。

「ちょっとお待ちください。ここまで走って替えてきますから」

私は額うなずいた。自然とそれ以上催促さいそくするのが申し訳なかった。しかし彼が走り去って駅から出た間に、列車はピーッと鋭い音を立て動きだそうとした。これには慌てた。彼が両替してくるこの何分かの間に列車が出てしまったらまずいことになる。もともと少ない本数なのに、これを逃がしたらいったいどれだけ時間を無駄にするやら。

不幸にも、私が心配したとおりになった。待っても待っても彼は戻って来ず、彼がようやく戻ってきた頃には列車はとうに出発していた。

「どうしてくれるんですか！」

私は大声で駅員きつもんを詰問した。

「列車が出てしまったじゃないですか。見えなかったんですか」

彼は息を切らして荒い息をしていた。それが走って来たからなのか、乗客の乗車時間に遅れた後ろめたさを感じているからなのかはわからな

かったが。私は心底腹を立てており、彼を罵りたい気持ちでいっぱいだった。しかし大汗をかいてつらそうな彼の様子を見ると、口をついて出そうな罵詈雑言も飲み込むしかなかった。彼は替えてきたお金を両手でうやうやしく私に差し出したが、その眼差しにはお詫びの意が満ちあふれ、ひたすら私に頭をさげた。

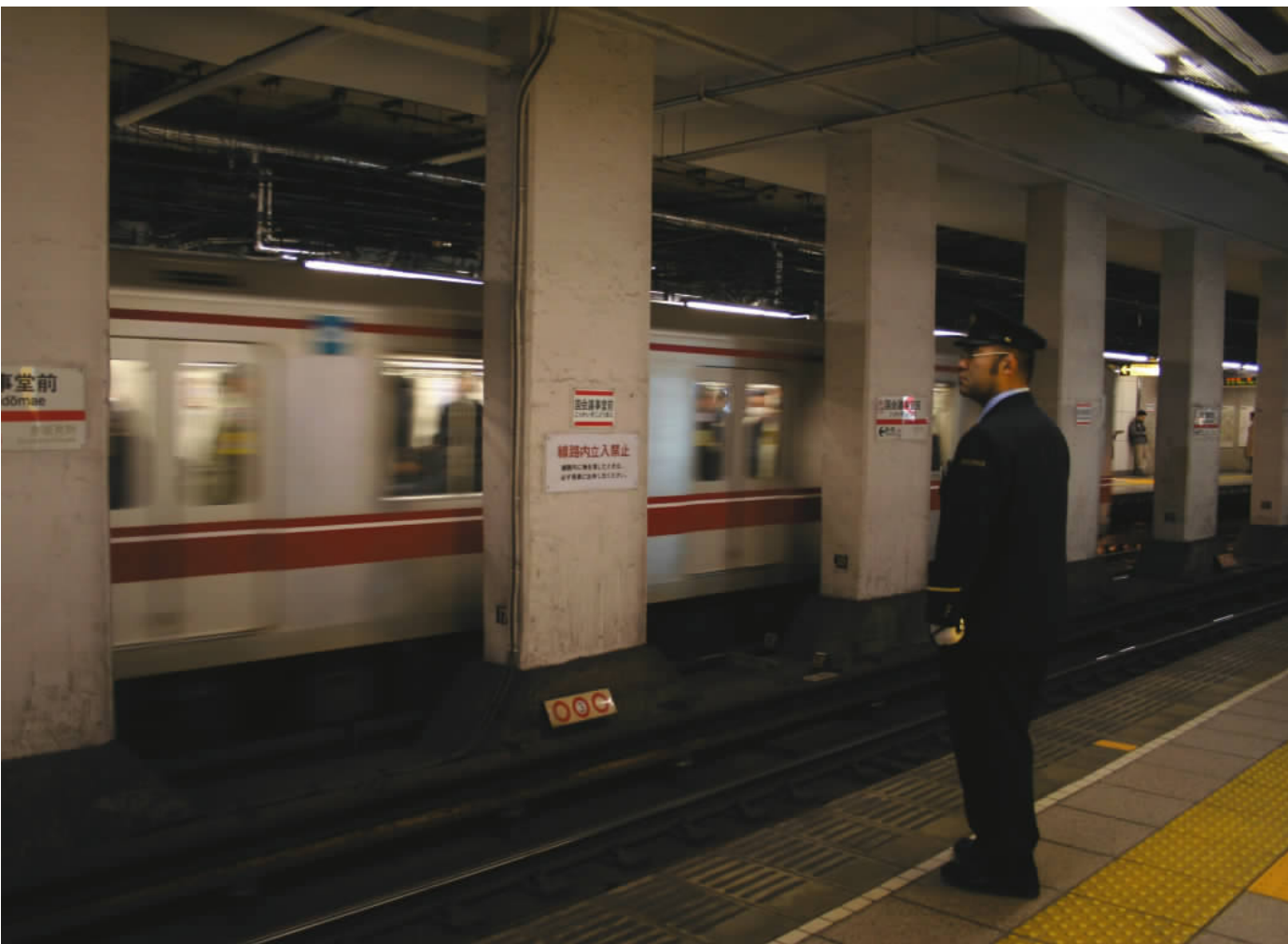
「昼間は人が少ないし、店も遠いから、両替するにも時間がかかって。本当に申し訳ありません。申し訳ありませんでした」

私は無言でお金を受け取ると、身を翻して券売機で切符を買った。心の中ではもう、これもいいか、ここに残って秋風を友にして次の列車を待とうか、という気になっていた。仕方がない。

人影のないプラットフォームへ進んだ。その間、さきほどの駅員はずっと私に注目していた。私の目は彼の過ちをおかした顔を映し出していた。彼は私と話をしたようなそぶりだった。おそらく、この物寂しい駅で列車を待つ私が退屈だろうと心配したのだろう。元はと言えば彼の過失だから、よけいに気が咎めているのだ。彼の眼差しは少なくともこのように私に告げていた。

私は気落ちしており、彼とは話をしたくなかった。しよせん彼は私に不必要な時間を費やさせ、「小さな汽車」の待ちぼうけを食わせたのだ。私はプラットフォームに日当たりの良い場所を探し、ひなたぼっこを楽しむことにした。駅員はまたほうきを持ち、彼がさっきしていた仕事を再び始めた。プラットフォームの上の落ち葉を掃除していたのだ。

プラットフォームには屋根がなく、天を突く大樹が駅の外から張り出していて、秋風が吹くと木の葉は、長い間宙を舞って、滑り落ち、不規則に地面に舞い落ちる。彼がまだ掃いていない場所は、落ち葉が山になっていて、彼が一掃きすると、落ち葉は意外にも均一に散らばった。ぼうぼうと



在平凡岗位上默默工作的值班员。

みだ  
乱れているさまには秩序があり、プラットフォームを絵で飾りつけるよう  
だった。

私はいぶかしく思った。一体彼は何でちりとりも持たずに落ち葉を掃  
き、そして落ち葉を掃きならした状態でやめているのか。彼はものも言わ  
ず、黙って落ち葉を掃き続けている。プラットフォームにはわれわれ二人き  
りだ。彼は動いている。手足はリズムカルに移動している。私は静かに  
している。元の所に立ち、穏やかな日差しを浴びている。それから落ち  
葉。これも彼と共に移動し、高く舞い上がっているのもある。

とうとう列車がやって来た。乗りこもうとした時、彼がこちらに向かっ  
て走ってくるのが見えた。小さな封筒を差し出して、ねんごろに述べた。  
「お客様、私の不注意から大変申し訳ないことをしました」

言葉を返す間もなく、列車はゆっくりと動き始めた。窓の外を見ると、  
彼は微笑み、きびすを返すとまたほうきを手にした。列車は走っている。  
すこし走ってから、私はさっきのプラットフォームの掃きならされた落ち  
葉が掃かれるごとにますます光に照り映え、人を陶醉させていたことに  
思い到った。秋の落ち葉はちょうどひと塊りの火に似て、太陽の光芒の  
中でまるでプラットフォームに美しい金の絨毯を広げたようだった。

この時、私はようやく悟った。駅員は毎日列車に乗る人が落ち葉のき  
らめきを見られるように、日に数本の少ない列車のため、黙々と掃き、落  
ち葉をならしてその最後の美を見せようとしているのだと。

ここまで思って、急いで封筒を開けた。なかには四百七十円分の硬貨と  
一枚の黄金色の落ち葉だけが入っていた。

そして封筒の裏側には大きな字で書かれていた。

防人 SAKIMORI !